



南極

第12号

平成14年7月18日

南極倶楽部会報

TADE - KUU - MUSHI (蓼喰う虫)

村越 望

第1次越冬中の1957年5月1日、変なサービス電報がフランス基地デュモン・デュルビールから来た。3月に続いて2回目の日本語の電報である。もちろん短波のトンツー、ローマ字であり、まず初めに4月29日の天皇の誕生日を遙かにお祝いいたします、という挨拶に続いて、今私は谷崎のTADE - KUU - MUSHIを読んでいます、というものであった。その頃、電報は夕食時に披露されて、必要に応じてその電報への対応をどうするかなどが話し合われた。たいていはキーマンである立見さんと公電係の藤井さんの二人にお任せしていた。さて、返事をどうするか、皆、顔を見回すばかり。「蓼喰う虫」が谷崎の小説であり「蓼喰う虫も好き好き」の言葉ぐらいは知っているが、恥かしながら小説は誰も読んでいなかったから、そのことについては残念ながら何も言えなかった。「フランス人から日本語で電報が来たのなら、こちらからもフランス語で返電したらどうだろうか」とか「当方

もカミュの異邦人を読んでいますぐらいのことを言ってやろうじゃないか」などなど甲論乙駁、そんなこと言たって誰がフランス文を書くのだとなると皆が顔を見回すばかり。その時、装備係が「だいいち仏和・和仏辞典は持ってきてないんですよ」の一言で威勢の良い話しは立ち消えとなり、ややこしいことは立見さんと藤井さんに任すことでチョンとなった。

蓼喰う虫の変な外人はエメリーさんといってフランス基地の副隊長だった。後で分かったことだけれどフランス軍の将校として日本に進駐していたとのことであった。どおりでと納得。世間様から見たら南極観測隊員は皆蓼喰う虫ではないだろうか。何を好んであんな最果ての不毛の地、風が唸り雪と氷しかなく、ネオンや一杯屋、映画館もない土地に出掛けていくのだろう。科学のためとか、人類のためとかお題目は必要だけれど、つまるところ個人個人にとってみれば南極が好きなんだろう。今ならエメリーさんに言ってやれる。「あなたが蓼喰う虫なんですよ」と。

蓼が好きなのはなにも虫ばかりではなさそうで、人様もあまり変わりはないらしい。

蓼喰う虫の親分もその例にもれず、訓練の激励と視察にたびたび信州に行かれたがその途中の昼食によく鮎を蓼酢で食べられたらしい。「鮎は蓼酢に限る」と言われるので、気を利かした下僚は蓼酢を求めてあちこち走り回るのであった。なにやら「さんまは目黒に限る」を思い出すのであった。

(1・4次冬・気象、9次夏・設営一般、10・12次夏・副隊長、15次冬・副隊長)

日本人と探検

柴田鉄治

朝日新聞記者で私と同期入社のひとりに本多勝一さんという人がいる。京大探検部の出身で、学生時代からカラコルム探検などで実績を積み、朝日新聞に入ってからも、カナダ・エスキモー、ニューギニア高地人、アラビア遊牧民などの「探検ルポ」で知られたスター記者である。ご存知の方も多いただろう。

その本多さんが常々、口癖のようにいていたのは「日本人は探検に理解がない」ということだった。ある日、その言葉を繰り返しながら、本多さんが怒りをぶちまけたことがある。堀江謙一さんがヨットで「太平洋ひとりぼっち」の旅を成功させたときだ。

サンフランシスコに着いた堀江さんは、アメリカ国民から大歓迎を受け、その勇気と冒険心が称えられたのに対し、日本では密出国が問題とされ、あたかも犯罪者のような扱いをされたのである。さすがに、アメリカの空気が伝わってきて、日本の反応も少しずつ変わっていったが、たしかに当初の日本の受け止め方は冷たいものだった。

私も本多さんの意見にほとんど同調しながらも、本多さんの怒りがあまりにも激しかったため、多少、日本人を弁護したくなって、「でも、日本人にも南極探検の白瀬さんのような人もいるのだから」と反論してみた。

実は、白瀬さんは立派な探検家でも、当時の日本国民は白瀬隊の南極探検に極めて冷たかったことを知っていた私は、「しまった。白瀬さんの例はかえってまずかったかな」と思ったときはすでに遅く、案の定、本多さんもそのことを指摘して、自説をますます強調した。

私も少し意地になって、「白瀬さんも日本人の一人だし、応援した大熊重信や当時の朝日新聞社だって日本人なのだから、そう決め付けなくても」と言い張ってはみたものの、この論争は、私に分がなかった。

本多さんに言わせると、戦後、日本が南極観測事業を始める時、それを「学術探検」と呼ばなかったことがそもそも日本人の探検嫌いの表れだというの

である。当時のいきさつは、国際地球観測年（IGY）の国際協力事業に日本も参加しようと提唱した朝日新聞の矢田喜美雄記者は「学術探検」と呼び、朝日新聞社もそれを支持したが、文部省の強い反対で南極観測と呼ばれるようになった。そんな経緯があったからだ。

たしかに、未知の大陸に挑む当時の状況からいえば、学術探検の方がふさわしかっただろうし、宗谷時代はそんな雰囲気だった。日本の観測隊を英語で言う時は学術探検隊なのだから、「探検に国家予算は出せない」という文部省の反対も、それほど根拠のある話ではなさそうである。だが、南極観測がすっかりルーチン化したいまとなつては、「南極観測」でよかったのかもしれない。文部省に先見の明があったとは思わないが……。

ところで話は変わるが、私には「探検家とはなんだろうか」と本気で悩んだ体験がある。人類が初めて月に着陸したアメリカのアポロ計画取材した時である。

私は7次隊に参加したあと、9次隊による極点旅行を取材するため、アメリカ隊に頼んで南極点のアムンゼン・スコット基地に飛んだ。途中、マクマード基地で「スコット小屋」も見学し、激烈な南極点一番乗り競争が展開された往時を偲んだ。その直後に、アポロ計画の取材を命じられ、アメリカへ向

かったのである。

南極から月へ、というわけで、私はアポロ計画取材しながら、終始「探検」について考えつづけた。人間が初めて地球以外の天体に降り立つ、これを探検といわずになんと言おう。ある意味では、アムンゼン、スコット以上の偉業だともいえるのに、この偉業を達成した探検家は誰なのか、考えれば考えるほど分からないのだ。

月に最初の一步を刻んだアームストロング船長が探検家だろうか。アームストロング船長は、月への一步は「左足から」と決められており、同時に「この一步は小さいが、人類にとっては偉大な躍進だ」という『着陸第一声』の内容まで決められていたのである。「宇宙飛行士はサル回しのサルだ」という人までいたが、こんな探検家がいるだろうか。

では、アームストロング船長らに指令を出している『サル回し役』、ヒューストンの宇宙センターの人たちが探検家であろうか。もちろん、そんなことはない。では、もっと遡って、「60年代に人間を月へ」とアポロ計画を命じたケネディ大統領が探検家といえるのか。これも変だ。

つまり、アムンゼン、スコットの時代から僅か半世紀あまりしかたっていないのに、偉大な探検事業の実現に、探検家がいなくなってしまったのである。「探検家のいない探検の時代」、そ

んな時代がきたのだなあ、と思いながら取材したことを懐かしく思い出す。

あれから30年余、考えてみれば、「探検」の意味も変わってきたのかもしれない。古典的な意味での地理的な秘境がだんだんなくなってきたからだ。代りに登場してきたのは、地理上ではない「社会の秘境」探検の重要性である。秘密のベールに包まれた社会の暗部はまだまだ多いのだから、これからは、それらを白日のもとにさらず探検家の活躍を期待したい。(7次夏・報道)

松本船長を語る

高尾一三

NHK「プロジェクトX 運命の船「宗谷」の映像の中で密群氷の宗谷の船橋にたつ船長の姿はわずか十数秒、その時、船長はどのようなお気持ちで操船されていたであろうか。もっと早くこの様な企画があったならば船長の語る氷海での経験は後に続く航海の責任者にとってどんなにか貴重な資料となったであろう。

船長は温厚なお人柄である。1次～3次まで三席航海士として仕えたが声高に怒られた事はなく、常にそばには「計算尺(当時は竹製スライドのもの)」を置き数字を走らせているという学者さんでもある。お酒を愛し、航海中、部屋で永田隊長とよく酒を酌み交わしておられた姿を見たものである。

ここに一枚の海図がある。海上保安庁(水路部)から調製発行(昭和33年9月)された海図である。目指す南極大陸のリュツォ・ホルム湾は下の方に小さく描かれている。その付近の山頂等の顕著な物標も記されてなく、1次の航海で宗谷が観察した水深が宗谷の航跡に沿って画かれているだけで、過去に一度も接近を許したことの無い白い大陸の姿が神々しく見えてくる。

船の位置の決定には、今まではGPSにより瞬時に決定されるが当時は天体(主として太陽)の高度により決めていた。氷海ではほとんどが曇り、晴天は数えるほど太陽はほとんど出ない。船長としては現在の位置は重要な意味を持つ。しかも正確に。午前第1回の太陽観測をおこない、正午ごろ第2回の観測を行なう。その2回で求めた2本の「位置の線」から正午の船位を決定する。その作業にあたるのは主に私と四席航海士の吉田くん。競争で位置を決める。その計算は約40分、大体が吉田くんが早く位置も正確、船長はご機嫌である。私はいつも吉田くんに救われていた。船長と今は亡き吉田航海士との緊張した位置の決定の瞬間は懐かしい思い出である。

素朴な気持ちとして「砕氷能力1m」の宗谷で船長はどんな気持ちで日本を離れたのであろうか。今となっては知るよしもないが、1次の航海について手元にある船長の論文の中から自分な

りに調べてみた。

昭和 30 年 12 月 10 日、船長が南極地域基礎調査に行かれ、その時の報告書にこうあった。「……船員が大陸をみる。至極当然なことのように考えられるが左にあらす。南極洋に 10 回以上も往復したというベテランでさえ大陸の姿を見た人は殆どないのが現実のようだ。特に我々の目標とする 0 度～100 度間の大陸は探検隊の内の一部の人を除いては群氷にはばまれ氷堤そのものを見ることができないのが普通であるのだ。1 月 15 日 1825 頃傾いた夕陽に映え神秘の扉の奥深く悠久の空に聳える白い大陸が見えたのだ。これは難問を解決する上に有力なヒントだ。その内の一つが今具体的に形而上のものとして表れたのだ。……時化と吹雪と霧の連続の南氷洋……色々の苦難を越えてきたこの身に白い大陸の日の出は次に来るべき難作業に対する敢闘精神と必勝の信念を芽生えさせてくれる。」と。

やはり船長としては何か心に期する具体的な“もの”が必要であった。密群氷を突き抜けて白い大陸に向かっていく。そこには“砕氷能力 1m”という物理的な数字はなかったのである。報告書の最後に「……もう私の脳裏に暗い不安は次第に消えて行くあの朝日と共に……」で報告書を終えている。

1 次の航海で船長が知り得ている唯

一のデータは宗谷の砕氷能力 1m という数字である。氷海での船体の強度、操縦性能は勿論のことその氷状もまだ未知数である。この報告書は未知の大陸を望み船長の氷と闘う心の中をかいま見る思いがする。

宗谷の船体は幅に対して長さが長く、舵はその真ん中で舵ききが悪い。方向を変えるのに数時間もかかり、そのうち氷状が変化してチャンスをつかんだことがあった(2月22日)。船長は次の改造計画で舵を2枚にして操縦性能の向上を希望されたが実施されなかった。密群氷中の氷状は不均一性である。宗谷は目標に向かっては進まない。氷の薄い方に進む。船長はこのことを「不自由な船」といった。しかし、船長はこの「不自由な船」で見事大陸に接岸したのである。「不自由な船」であったからこそ氷海の知識をより多く得ることが出来たと語っておられる。この自然に対する謙虚さ、自然にさからわず自然現象を利用する慎重さは船長の論文の随所に現れている。(つづく)

(1～3次宗谷・航海)

シンガポールの南極人

楠 宏

第1次の「宗谷」はシンガポールとケープタウンに寄港することになっていた。ユネスコ出版の世界海洋研究者名簿のシンガポール在住研究者の中に

英国人名を見つけた。1956年当時は英国領であったため英国人がいても不思議ではなかった訳である。郊外のチャンギにある海洋生物研究所には所長のフランシス・オマネイ（Ommanney）と若い研究者がおり、市庁舎内には中国系のプランクトン専門のタム（譚亜九）博士がいた。当時中国系研究者で学位をもつ者は少なかったので少々驚いた（彼からは署名入り論文をもらった）。

オマネイの名はオックスフォード大学双書の「ザ・オーシャン」（1949）を読んでいたので知っていた。彼は1930年代に英国が南氷洋の鯨調査のために設けた「デスカバリー委員会」の仕事をしたのだった。1924年にデスカバリー号（スコット第1次隊の用船を買い上げ）でサウスジョージア島の捕鯨基地へ行って、翌25年の越冬前の2月5日から5月11日の間に鯨241頭を解剖したという。鯨は空気を入れて海面に浮かせておいたため腐って悪臭ガス爆発があり、時には刀を入れ過ぎて大腸を破り全身が黄褐色に染まったこともあった。

彼をチャンギに訪れた時、「暴風圏を越えると天気が良く海は荒れない」と言われ、南氷洋は荒海という先入観があっただけに耳新しかった。片舷60度も揺れた「宗谷」も浮氷域では沈まぬ太陽の中で、なんとなくのんびりしたものであった。チャンギの名は日本

人戦犯収容所所在地として知られており、市内の博物館の標本ラベルに「昭南博物館」の文字がまだ残っていた頃の話である。8次の帰りにバード隊の船の機関士が「ふじ」を訪れてきたのもここだった。（1次夏・海洋、8次夏・副隊長、10次冬・14次夏・18次冬隊長）

スカーレン地区でのこと

吉田光雄

1969年2月3日発6日帰艦の予定で、基地南約70kmに位置するスカーレン地区の調査にでかけた。編成は、9次隊は高木同行記者（朝日新聞）と筆者、10次隊は地球物理定常、地学（内陸調査）、生物、海洋物理、記者および医療の12名で合計14名であった。

スカーレン氷河の末端に行った。そこには氷床から白濁した水が、岩石の間をやや勢いよく流れていた（写真は氷河末端の流水状況を示す）。これは、岩盤を氷河の底がこすってできる、グレーシャー・ミルクと云うものである。識者のこれは不老長寿の霊水であるとの説明があった。この教えに従い競って飲んだ。すくって飲んだところ臭い、味、舌触りもなかった。

調査作業が終わり帰艦予定日の6日ころから、空模様が悪くなってきた。迎いのへりは飛ばないと思っていた。調査隊の様子を知らせようと、ペダル

(足踏み)発電方式無線機で、何回か試みた。この無線機は送信のとき負荷がかかり、足がくたびれた。しかも、交信できず信用を失い、踏み足がいなくなってしまった。そこで、乾電池式無線機を体温で暖め、小高いところに登り、こちらスカーレン、ふじ、ふじと数回呼びかけた。松島艦長がでて「みなさん大丈夫ですか、必ず迎えに行きますから、がんばってください」など。問いかけに対し、みんなは元気、燃料と食料は 11 日までである。短時間の交信で電池が終わりプツンと切れた。「ふじ」では天測に必要な短波時報をきいているだろうと、5MG、10MG の放送で呼びかけたと後で聞いた。2 月 10 日、ヘリの音が聞こえたので、発煙筒の安全栓を引き、テントをたたみ、商売道具のトランシトを抱きかかえ、ホバリングの機内に転がり込んだ。機内

は無言、艦に降りて、防寒服のポケットを指さし「チョコレート、ビスケットあったよ……」とお互いの無事をよこびあった。乗鞍の訓練を思い出していた。ピセットの間は退屈した。対処法を知っている人がいて、ダンボール箱を利用した手持ち卓、牌を作り麻雀となった。艦長がその間何をしていたのと尋ねた。発案者は一式をだしたところ、よい記念の品だと所望したので、プレゼントしたように思う。(注：昭和基地では、この遊びをする暇な人はいなかった。また、御法度となっていた)

当時の基地日誌によると 2 月 4 日から 10 日まで、この付近の天候が悪く、旅行隊も足止め 4 日となっている。春一番ならぬ、このあたりの冬一番と思われる。(9 次冬・地球物理)



写真：氷河末端の流氷状況

日ソ交渉顛末記

島崎里司

昭和34年10月31日東京出発の第4次南極観測が私の初参加でした。第2次で越冬観測断念の教訓から、第3次から大型ヘリによる空輸方式により、大きな成果を収めたあとで、大いに期待されての船出でありました。

私自身は、前任者の怪我により出港1か月半前に急きょ発令されての乗船であり、慌しい出発で特に乗船経験がなく船酔いに悩まされた苦しいスタートでしたが、5次・6次と宗谷の最後まで、南極観測業務に関係でき、大勢の人達に支えられたことを感謝しております。

表題は、昭和35年1月9日付けの南極新聞第26号に掲載された文で、第4次の立見隊長、明田船長、この記事を書いた犬塚隊員も、故人となられて時の流れを感じざるを得ません。

当時は、ガリ版(孔版)刷りで、読み難いところもありましたが、南極新聞が唯一の情報源・娯楽源として、その発行を楽しみにしていたことを懐かしく思い出しております。

以下に昔を偲び全文を紹介します。
(犬塚特派員発)

昭和35年1月2日をわれわれは記憶しなければならない。それは宗谷外交の勝利の日である。外交の勝利には幾つもの場合を挙げうるであろう。タレーラン外交はウィーン会議における

弱小国の勝利である。ランツアウト外交は第一次大戦後の独逸の滅亡をくつめた意味での勝利である。小村外交は戦いには勝ちながら、戦力は極度に落ちていた当時の日本を背景とした勝利である。しかし、もう一つの場合を考えなければならない。

それは要求を通させながら、友好関係を一層緊密にし得る外交の勝利である。平和を希望する未来の世界においてはおよそ外交の勝利とはこうした概念になっていくであろう。外交、つまりデプロマシーはデプロマ(文書)という言葉から生まれた元々平和な概念であった。

宗谷の外交は平和、かつ文化的であり、しかも、それは署名を必要とする文書の一片さえも存在しない。それこそはドビーニン大使と明田、立見両全権の心の中に署名を待つ永久に忘れ難い外交なのであった。私は南極新聞の特派員として、この交渉席場と指定されたオビ号に出かけた。

会場に赴く両全権の足取りは、これを説明するのは実にしのび難いが決して威風堂々たるものではなかった。深い雪を足先でさぐりながら、山や、出身の立見全権が先導に立った。明田全権はあえなく転がった。立上った彼は雪を払いながら下松随員に「体重のある奴が先に歩け、お前が通れるところなら氷は大丈夫ぢゃろ」というようなことを云った。オビ号の正面に回った

とき、あわれな宗谷の政治家二人は「フー」と鼻の穴をふくらませてその大きさに感嘆した。

ドビーニンソ連全権は舷門に出て待っていた。握手が交わされた。船長室に通された日本外交委員団は先ず壁にかかっているマルクス・レーニンらの肖像が眼についた。ドビーニンの背景にはこれら指導者の教訓がある。ところで立見、明田全権のバックは何であったか。

「朝のコーヒー1杯がのめるなら世界は滅びてもいい」といった地下室の主人公的ニヒリズムでは勿論ない。といって革命家でもなく、救世軍的信心家でもない。また熱狂的な国粹主義者でもない。二人の精神の骨格は恐らく「ほどのよさ」によって示される善意と良識であるだろう。私はふとある不安をおぼえた。

人間にとって最も大事なこの美德はつねに過激によって傷つけられるからである。最初の「過激」が立見全権の「ほどのよさ」を襲った。すなわち、ウォッカが彼の胃の腑を襲ったのである。明田氏はドビーニン氏から「貴官は何を召し上がりますか」と聞かれた時ひるまずに「EVERY THING（何でも）」と答えたのである。私も1、2杯のウォッカで上気していたが、明田全権の飲みっぷりを眺めた。ソ連人並みに一息でキュッと乾した途端に薄くなりかかっている頭に突然、異変が起

こった。毛が3本「ワーツ」といって立上ったのである。たとえ頭が驚こうとも明田氏の顔は驚かなかった。頭と顔の境界線が次第にうすれつつあるとはいえ、顔と頭は全然別ではないか、というのが彼の思想であったからだ。下松航海長はその若さ（ソ連には熊の年令の見分けはつかないという諺がある）と美貌と偉軀が高く評価された。「貴官はスポーツは何をなさいますか」

「柔道をいたします」

「ジュードー？」とドビーニン大使は頭をひねったが「あージュージュツ」と叫んだ。

「YES SIR」

「おおイケマセン。それよりパレーボールはどうですか」

「YES, YES」

下松随員のこの無責任な返事が翌日の試合を決定し、宗谷の大敗北をひきおこしたのである（筆者注記、この時は連続空輸作業中で参加できなかった）。その上、下松随員はかなりの英語の使い手として知られていたが「ウナギのカンヅメ」が出されたとき、「これはスネイク・フィッシュ（蛇魚）ならずや」という珍語を創作してソ連全権団を驚倒せしめた。

ちなみにウナギは EEL というのである。この間、ソ連側のベルチューニク、マシーモフ両随員は一言もしゃべらなかつた。すべてドビーニン全権の

一人占めの発言であった。家族の話、船員の娯楽の話、酒の話、雑談はつづく。そのうち、宗谷が持っている南極海図、1次から今次までの航跡図が渡された。ここで立見全権が本論に入るきっかけを見つけた。立見全権が「閣下は何日位滞在の御予定なりや」と聞いた。するとド全権は「私の方では3日あればいいと存じます」

「それは何トンのガソリンを運ぶのですか」(注・ソ連機が昭和基地へ飛来時に必要な航空ガソリン)

「30トンです」こうして立見全権は30トンの確言にありついた。30トン運ぶと一度言えばあとで「15トンでやめときます」ということにはなりにくいであろう。

「ところで閣下は何日ほど御入用ですか」とド全権が聞く。その質問を立見全権が明田全権に手渡した。船長が答えるのが一番いいと判断したからであった。明田全権はグッと胸をそらし、身体を深くイツに収めて、突然英語で答えた。それは正に身の毛のよだつ英語であった。単語を積木細工のように重ねた。しかも前後、左右バラバラの構文であった。日本人に判りやすいのは日本人の英語である。(つづく)

(4~6次宗谷・航空)

ネラ・ダン号救出の思い出(1)

倉田 篤

1980年、砕氷艦「ふじ」副長として南極観測事業に関わりを持つようになってから4回にわたり南極行動に参加する機会を得ましたが、この中で最も強く印象に残っているのはやはり22次行動で初めて南極の神秘的な大自然に触れたときの感動と、27次行動におけるオーストラリアの南極観測船「ネラ・ダン号」の救出作業であります。前者は南極行動に参加した者ならば誰もが経験することではありますが、後者については得難く、かつ、大自然の前に人間の無力さを思い知らされた経験として忘れ難いものであります。

「ネラ・ダン号」救出に至る経緯

砕氷艦「しらせ」は、第27次南極観測支援行動のため1985年11月14日東京港晴海棧橋を出港し、最初の寄港地フリーマントルに向け順調な航海を続けていた。23日にロンボック海峡を通過してインド洋に入り南下を続けていたが、フリーマントル入港を3日後に控えた25日に「ネラ・ダン号」ビセットの第1報がもたらされた。

ビセット地点は、昭和基地の北東約320海里で船体・機関に異常はなく救援要請等も出ていないというものであったが、該船の早期自力脱出を祈りながらも氷状の厳しさが思いやられ、覚悟を新たにして28日午前予定通りフリーマントル港に入港した。

早速、在外公館等に問い合わせたが状況を得ず、ニュースにもなっていない

いので無事脱出したのであろうと安心し、南極圏突入を目前に最終の整備・補給作業に専念していた。

ところが、12月1日に某商社のエージェントが突然来艦し、「ネ号」に対する燃料等の輸送支援を依頼してきた。しかし、状況によっては、当方の任務・行動には勿論のこと、今次の南極観測事業にも影響を及ぼす恐れもあるので当方の一存では決定できない事を説明し、外交ルートを通じて日本国政府に正式に救援要請を出して貰いたい旨を伝えた。

これを機に事態は急展開し「しらせ」は「ネ号」の救援を命ぜられ、2日は燃料や救援物資の搭載に忙殺された。また、2日に得た情報によるとオーストラリア側も「ネ号」救出に手をこまねいていたわけではなく砕氷船「アイスバード号」を派遣し救出にあたっていたが、厳しい氷状に阻まれて断念せざるを得ず「しらせ」に救援を求めてきたこと、さらに、家族等に与える影響も考慮し公表を差し控えていたので入港後も情報が得られなかつたことなどがわかった。翌3日一般市民多数の見送りを受け、オーストラリア国民の厚い期待を背に感じつつ、予定を繰り上げ0800勇躍フリーマントル港を出港した。

航程を短縮し現場到着を早めるべく航海計画を変更したため、暴風圏内の航行時間が増え厳しい航海を強いられ

ることになったが、氷海に閉じ込められている「ネ号」の一刻も早い救出のことを考えると心も急かされ荒天航行を強行した。

5日には「ネ号」と通信連絡を設定しその後の交信で現場の状況把握が可能となったが、さらに幸運なことにオーストラリア観測隊に日本の池田博士が参加しておられることもわかり、以後の意志疎通が極めて円滑に行えるようになった。これが救出成功に大きく寄与したことは云うまでもないことである。

8日1000頃、南緯55度線を通り、1400過ぎには初氷山を視認し、いよいよ南極の感を深くしたが「ネ号」迄まだ1500海里もあり、これからが正念場と気持ちを引き締め西航を続けた。
(つづく)(27次しらせ・艦長)

南極行、事前の準備

大和田雅行

(1) 寒冷地訓練

昭和44年11月、第11次南極観測のため「ふじ」が出航した。この年の2月、初めて南極行動に参加する予定のパイロット、整備員を対象とする寒冷地訓練が行われた。場所は、北海道の網走近くの湧別湖である。(現在は青森県の大湊基地で行われている)

真冬の北海道のこと、夜間は氷点下20程度まで気温が下がり、日中も風

が吹くと本当に“しばれる”という感じになる。

湖では凍結した湖面にヘリを着陸させるため、木材を使ってランディングマットを作る。つまり、氷上のヘリポートである。マットの設置場所を決めるため、数ヶ所にドリルで穴をあけ、氷の厚さを測る。湖の表面は一応凍ってはいるが、歩くと突然ポコッと落ちる水溜りの場所がある。場所を決めると卓越風向に向かって着陸するようにランディングマットの向きを決め必要な大きさのマットを作る。マットが完成すると、風見を立て、誘導員を配置し、離着陸訓練の準備完了。

やがて陸上自衛隊の美幌駐屯地に待機しているヘリが飛んできて着陸をする。高度を下げると雪が舞い上がり周囲が見えなくなる。最初は凍った湖面上ということもあってか慎重で、なかなかパワーを抜かない。徐々に重量をかけ、やっと、完全に着陸する。ヘリが重量を掛けるに従い、氷盤全体がジワッと沈み、雪面に水が染み出して来る。服装は防寒着、防寒靴であり体の自由はきかない。初めての経験でもあり、あまり気持ちのいいものではなかった。しかし、氷は以外に強いなと思ったものである。

南極でも風の向きを考え、同じ要領で氷上にマットを作成するが、ヘリに燃料を搭載するため、「ふじ」からの距離は接続する燃料ホースの本数で制限

される。ちなみに11次では15mを9本繋いだ。

(2) 基地訓練

「ふじ」が出航する前の10月には館山基地において、S-61Aヘリによるスリング訓練（ネットにいった荷物のヘリによる吊り下げ輸送）を行った。地上の作業員はゴムの手袋をし、金属棒でヘリのフックのアースを取る。勿論手で持つ部分は絶縁材で覆ってある。ヘリが荷物の上でホバリングしている時に荷物の上に載り、アース棒でヘリのフックに触れ静電気を放電させる。アース棒を接触させた状態でフックに網を掛ける。ヘリが前後に移動し、アース棒が数秒間離れた時にあせてアースを取るより先に網を掛けようとフックに触ると強烈な電撃を受ける。特に昭和基地に近接して接岸した場合は2機のヘリが短時間で戻ってくる上、雪上では荷物から荷物に走り回り、速やかに次に輸送する荷物に行かなければならない。頭上のヘリの爆音にせかされ、焦りからついフックに触れてしまう。また、アース棒を持っている者も油断すると強烈な電撃を受ける。見ていると簡単なようで、結構怖いのである。(11・12次整備士)

東オングル島観光案内

佐々木昭人

昭和31年11月8日、「宗谷」が第1

次南極観測隊を乗せて、晴海埠頭を出発してから今年で 45 周年に成るそうで、月日の経つのは早いものですね。第 6 次で基地を一旦閉鎖したのですが、現在の昭和基地の規模は当時と比較にならない程大きく立派に成っていますが、閉鎖当時の基地周辺の状況を知る方も少なくなったように思われます。

あらためて振り返ってみようと思い、丁度第 6 次行動中の宗谷船内で発行された「南極新聞」の中にそれが在りましたのでご紹介いたします。この記事の筆者は、多分第 5 次越冬の松田達郎隊員（生物担当 当時 35 才 通称婆さん）が第 6 次の宗谷で帰国の途中投稿されたものと思われます。



「南極昭和基地 観光案内」昭和 37 年
1 月 25 日木曜日

只今ネスオイヤの上空をかすめ、昭和基地ヘリポートにお着きになりまし

た皆様、ながい船旅、空の旅、ご苦勞様でした。このヘリポート・ターミナルは昭和村の頭、村山雅美氏「妾の子」を書いた雅美女史と同名ですが、この

人は優しい男)が皆様をお迎えするため、夜の12時までかかって40代の人を動員して作ったものでございます。ここから弾丸道路を東へご案内するお車は通称「百姓」小松農民車でございます。

30秒で郵便局前、ここは電離棟と呼ばれる建物です。ここで降りになり、夏は溪流、冬は氷の通路を、足元にご注意の上お通り下さいますと無線棟をすぎ、食堂へと参ります。食堂棟の通路には原住民の食品が並べてあります。お金は要りません。お勝手にご試食下さい。お茶をお飲みになり、一服されましたらオングル島の島めぐりをご案内いたします。

基地から南の天測点を右に見て雪と岩の道のオングル観光ルートを歩きましょう。その昔、初めての南極越冬隊員がショイコにチンケスを背負い水を汲んだという池が見えて参ります。正面に見える高さ40メートルの山脈を登ることに致しましょう。この山脈の西の方、最高に高い山(43.4m)があり、その峰のすぐ南西には最も高い湖もあり眺望絶景、南方にはラングホブデ山群、西には南極大陸の冷たい氷がキラキラと輝きこの世のものとも思えぬ神妙な眺め、しばらく参りますと俗称慎太郎山から南西にのびるこの島最大のドリフト、あたかも白く豊かな佳人上をフンワカと歩く如きであります。

見えて参ります湖水群、その中に際立って青濃の(深さ約1m)池、湖畔に一寸した突起岩を持つこの池を「みどりが池」と申します。その昔ここを訪れた高貴な方が、思い出の人の名を、そして果たせぬ思いをこの池の名に託したというローマンチックな物語が秘められております。この池には藍藻・緑藻と数多くの植物が湖底に繁茂いたしております。特に丸い粟粒ほどの緑藻が湖底に点々と沈む様はくすしくもみどりさんと呼んだ人の声を哀れんでいるかのように思います。今度は二つの岩が相寄り添った胎内めぐりをご案内致します。これもその昔今の村山隊長が若かりし頃、この二つの岩の間をくぐりながら母親(女類)の愛情を感じ、命名されたというオングル島第一の観光資源でございます。ここから南西に見える島はポールホルメン、一名ザクロ島でございます。生物はほとんど無いがここにはザクロ石が多く出るといわれております。昔からここに住む男達が遥かなる乙女に思いをはせつつこの島に渡り、青い鳥ならぬ赤いザクロ石を拾ったものと伝えられております。今は屑物しか落ちていず、ハッパでもかけて新しい鉱脈を出さない限り乙女の心を満たすガーネットは得られないと言われております。

さてオングル島の南にある山々を西へ参りましょう。南に見える海岸は断崖があり、下にはタイドクラックが入

り乱れております。運が良ければ生き
ている貝(ちょうどホタテ貝を小さく
した様な)が出ていることがあります。
貝ヶ浜にはこういう貝が数多くあった
ものですが、ここを訪れる観光客に持
ち去られ、今は貝ヶ浜の名称だけが淋
しく貝の名をとどめることになってし
まいました。オングル島の西の半島の
山かげ(南西側)は暖かく、そしてド
リフトのため適当な水分の供給を受け
てナンキョクマゴケの大きな群落があ
ります。地面や岩の間に這いつくばっ
たように南の太陽をまぶしげに夏の間
だけ顔を出しますが 50 年 100 年の年
月を経ても見られるということです。
雪や岩の道ではさぞお疲れの事と思
います。

ここで一休みいたしましょう。ここ
から西に見えますのが長髪海峡をへだ
てて西オングル島でございます。その
向こうはるかにポツンと見えますのが
弁天島となっております。(背の低い人
は見えませんがね) さあ、これから最
高点の西を通して基地へ急ぎましょう。
もう天測点が見えて参りました。北に
見える小高い山の向こうにスキー場が
あります。原住民は、老いも若きも上
手も下手も皆楽しく一年中すべれると
いうのがこのスキー場の良い所です。
オングル一周を終わりました。次の飛
行便が来るまでにしばらくございます。
モーソンやラザレフ、大和山脈、最近
は奥氷河から沿岸調査の飛行機が発着

する国際空港、かつてこの基地のもの
すごいブリザードのため行方不明にな
られた福島隊員をまつ「福島ケルン」
すべて皆様の写真機に収めて頂きたい
ものです。また、すぐ北のタイドクラ
ックでは魚も釣れます。次の航空便の
来ますまで基地見物におくつろぎくだ
さいませ。(T・T・M・K・K)(4・5・
6 次宗谷・航空)

第 6 次南極観測航海

稲葉光秋

宗谷による南極観測は、海保に入庁
した昭和 31 年に第 1 次が開始された
ので、よく知っていました。昭和 36
年 8 月、第 6 次観測に乗組員として乗
船しました。当時の海保の巡視船は、
日本近海での漁船の海難救助が主な仕
事でしたので、宗谷では貴重な体験を
しました。諸訓練、補給等を行ったの
ち、10 月に東京を出港、シンガポール
へ入港しました。

シンガポールは、爆発物(氷盤を破
砕するダイナマイト)を積んでいると
の理由により、ブイ係留でした。まだ
第二次大戦の影響が残っていて、制服
での上陸は禁止されていました。同僚
と市内観光に行ったり、一人でパブへ
入ったりしましたが、多数の外国人の
中にいても日本人を意識することはあ
りませんでした。シンガポールで小さ
な宝石 1 個とスイス製腕時計を買い、

宝石は、あとでよく見ると注文したときにはなかった傷があり、時計は約3年で故障しました。カモにされたのだと思いました。

真夏のインド洋で送風のみ居室は暑く、甲板作業は、天幕を張って日陰で行いました。10ノットの速力で約3週間の航海でした。ケープタウンでは、港内の岸壁に係留し、制服で外出することができました。

第二次大戦で日本軍と戦ったという男性と話をすることがありました。同僚と自宅に招待され、車で市内観光の案内をしていただきました。また、地元住民の柔道の練習にも参加しました。若い女性が柔道着の中に厚い下着をつけて男性と一緒に練習しているのを見て驚きました。地元チームとの野球の試合もありましたが、練習不足と慣れない芝生にスパイクが引っかかり、良い成績はあげられませんでした。

ケープタウンから南極は、時化の日が多くて横揺れが激しく、ベッドで寝るときは、体の両側に毛布を丸めて入れ、体がゴロゴロしないようにしました。12月、昭和基地沖合の定着氷に入りました。南極大陸は広大で、見渡す限り白一色の景色に圧倒されました。人間の存在がいかに小さいものであり、自然の中の一部に過ぎないことを痛感しました。氷状は悪く、何回となく氷に閉じ込められて身動きできなくなり、

このまま宗谷で越冬するという冗談も出るほどでした。氷に閉じ込められたまま、大きな氷山の方向へ流され前後進一杯を繰り返して、辛うじて冰山をかわしたこともありましたが、南極観測は、第6次で一旦終了することとなっていましたので、撤収航海でもあったわけですが、氷状が悪い中で何とか終了し、昭和37年2月、帰途につきました。

ケープタウン、シンガポールへ寄港して4月、東京に入港しました。帰港後、宗谷は船体塗色を白に変え、巡視船になりました。その後、宗谷は解役となって船の科学館の横に係留され、昭和53年、新しい砕氷型巡視船『そうや』が建造されました。この『そうや』にも乗船しオホーツク海のアイスパトロールを2シーズン経験しました。オホーツク海は10~15年周期で氷状が厳しい状態になり、ちょうどその時期でした。氷に閉じ込められた10隻余の底曳漁船を救出したのち、移動中、重なった氷盤の中で2軸8枚(1枚約1トン)の推進翼すべてを曲損するというトラブルもありました。

海保退職後、5年は経過しました。現在、東京湾で港湾土木に関する仕事をしていますが、船の科学館の横の宗谷を見ると、未だに南極観測航海を懐かしく思い出します。(6次宗谷・航海)

幻のぎ装員長（艦長予定）

久松武宏

私が“しらせ”ぎ装員の時の話である。

海上自衛隊新聞というものがあるが、ぎ装員として着任後のある日、その紙上に“しらせ”ぎ装員長、三等海佐久松武宏」と載っていたのである。ぎ装員長とは艦長予定で、その時には既に佐藤ぎ装員長がおられ、ぎ装業務を統括しておられた。

それを見つけた先輩達は、大騒ぎで（明らかに“ぎ装員”の間違いというはわかっているのに大袈裟な話にする得意な人がいた）「久松、お前ぎ装員長になっているぞ。ぎ装員長は二人も要らんから、ジャンケンで決めろ...等々」好き放題なことを言っている。その内、その新聞社に電話して確認するという事になった。

「しらせぎ装員の ですが、先日の紙上に“しらせぎ装員長、久松...」と、ありました。ここには既に一佐のぎ装員長がおられ、二人もぎ装員長は要らないんですが...困ったことに久松本人はすっかり、その気になって本来の仕事をしなさいですよ。新聞社の係員は若い人らしく、タジタジのようであった。「わかりました。ミスプリントということですね。本人にはよく言うておきますので、任せておいてください。特に訂正は出さないと云うことですね。お騒がせしました。周囲に

いたぎ装員達は腹を抱えて大笑いをしていた。

そんな“しらせ”も間もなく就役 20周年を迎える。（12 次ふじ・艦長付、20・21 次ふじ・船務長、25 次しらせ・船務長、28・29 次しらせ・航海長、31 次しらせ・副長、34・35 次しらせ・艦長）

我ら皆探検家

池田 宏

中学生の時、先生から 1911 年南極点到達レースがアムンゼン隊とスコット隊の間で争われたが、スコット隊は帰路でブリザードに襲われテントの中で悲愴な最後をとげたことを聞かされた。私は成功したアムンゼンよりスコットに心を引かれた。その時、自分は南極探検家になるのだと心に決めていた。

それから約 15 年、米国の旅行社が初の民間人初の南極探検クルーズを発表した。世界中から死ぬまでに一度でもよいから南極大陸に立ちたいと熱い思いを持ちつづけ 51 人（私も含む）がアルゼンチンのウスワイアからアルゼンチン海軍の船で南極半島へと向かった。この時の合言葉「何も持ち込まない。何も持ち出さない」は今でも守られている。

初めての体験は、私をますます熱くしてしまった。ニュージーランド航空

による空からのパノラマ探検、ロス海、東南極、南極大陸一周（66日間）で昭和基地訪問など35年間に15回訪れることになってしまった。

この10年間乗船するのはロシアの砕氷船は約1万トン。2機のヘリコプターを搭載し、海氷の偵察、ボートでの上陸不可能な時の乗客の搬送、氷河見物と我々をあきさせない。

乗客は世界中から集まった90名中の8割がリピーター。各自10冊以上の本を読み、自分なりの研究テーマを持って参加して来る。

毎日数回のレクチャーは、エクスペディションリーダーをはじめ、各国の南極基地での研究者、海鳥、動物、地質、探検歴史家、ナチラリストが多く、の slides を利用しての講義だった。英語に不自由な私でも、楽しく南極の専門的知識と理解を深めることが出来た。講義の後半は参加者からの熱い質問や意見の交換がくり広かった。

各国の基地では我々を暖かく迎え入れてくれた。隊員一人一人が自分の研究テーマをコンピューターの画面に出し解説してくれた。今の南極を体験し知識を得る喜びを味わった。味と云えばオーストラリアの3基地を訪れると、現地限定地ビールののど越しは格別の体験であった。

夜、船のバーでは今日の体験話から世界経済の動きまで幅広い話題でにぎわった。参加者の9割が日本を訪れた

経験者、私より日本を知っていることに驚かされ、私なりの新日本発見が出来た。

旅の快適さは食事である。乗船しているシェフ達は和・中・洋をこなす技をふるって、あきさせない工夫が毎日味わうことが出来た。

90～100年前の探検家たちが、我々の快適な探検クルーズを見たら何と云うだろうか。私は現代探検家をつくづく良かったと毎回感謝している。

本年11月より67日間南極大陸一周クルーズに参加する。同じ場所を何回訪れても、大自然は異なった風景を見せてくれる。そして自然の厳しさを発見させられる。

南極の温暖化がさわがれているが、私の体験だと、冬でも雪が積もらず流れ込む氷河も溶けてしまい、池の水も凍らないと聞いていたドライバレーが、夏なのに1センチメートル以上の雪が積もっていた。ロス湾で一面浮氷にかこまれ、10/10の氷は動こうとしないため半日以上、船は立往生させられた。訪れる度にロス湾の浮氷は広く厚くなっているように見えるのだが。

次回の大陸一周探検クルーズでも、氷河の氷で作ったオンザロック片手に、大きな美しい芸術作品の冰山と昔話を聞かせてもらおう。(日本旅行作家協会、日本写真家協会)

南極半島海中温泉の旅

安井和憲

知らない人が聞いたら「？」と言いきり、
そんな長年の夢だった「南極の温泉に入ること」「南極大陸に上陸」という2つの目標を3月初めに実現させました。4月末での定年を前にして18日間の「南極半島及びフォークランド諸島の旅」に参加しました。昨年9月のニューヨーク事件の影響を受けアメリカ経由だったのが成田、スイスのチューリッヒ、ブラジルのサンパウロ、アルゼンチンのブエノスアイレス、最南端のウシュアイアという長い飛行機の旅となりましたが、ウシュアイアでロシアの砕氷客船「カピタン・ドラニツイン号」に乗船しました。我が「しらせ」より少し小さい総排水量1万トンで客室は全て上甲板から上で全客室海側です。

まずは元の職業柄通信長にご挨拶！そして通信室を案内してもらいましたが全く通信室と言うよりパソコンルームの方がびったりで送信機受信機の類は各一台のみで交信相手はヘリが飛んだ時の連絡用とのことで後は全て衛星通信施設のみで、通信機用のアンテナは全て撤去されており、トンツアーが懐かしく感じました。

ドレーク海峡も静かで、出港して2日目に南緯60度を超えて久し振りの冰山や氷河を目の前にしてブリッジに居る時間が長くなりました。最初の上

陸地点はアイチョー島でジェンツーペンギン、あごひげペンギン、アザラシそして盗賊カモメに出会い、第7次南極観測の事が頭の中におぼろげながら浮かんだものでした。

ミンク鯨や氷上でノンビリ日向ぼっこをしているアザラシを横目に次なる上陸地の英国基地「ポート・ロックロイ」を目指しましたが風が強く上陸不可となり島より3人常駐の内2人が乗船してきて手紙を持ち帰りました。4月3日現在未着です。ギフトショップや郵便局があったのに残念！

ルメール海峡、ピーターマン島、さらに南下、3月3日に念願の南極温泉があるデセプション島に近づき幸運にも風が弱まり無事湾内に入り投錨。前方に湯気が会場一面に立ちこめていて、まさしく温泉の雰囲気を感じさせています。さっそくゾディアックで温泉のある場所へ上陸、海水着に着替えていざ「南極海中温泉」へ、「熱い！」これじゃ入れないと思いきや場所によって熱くない所冷たい所などまちまちで、気温摂氏2度、水温40度位？の温泉というより遠浅のお湯遊びといった表現がぴったりのような気がしました。入湯？した人は数カ国約30人ほどでしたが、童心に戻ったように大いに温泉気分を堪能していたようです。因みに数カ国人の男女混浴温泉？

入る前は寒かったのが嘘のように身体が火照り2日間位ぼかぼかとしてた

のでさすが温泉の効用?かなと大満足。この温泉の位置:南緯 62 度 59 分西経 60 度 36 分です。入湯証明書?も発行したり氷山に 1m 近くまで大接近したり、ヘリで海水や氷河に着陸したり船の回りに大接近しながら旋回したりと日本では到底考えられないロシア砕氷船のサービスには吃驚しました。また年末には 68 日間の南極大陸一周船旅が計画されているようです。

3 月の南極倶楽部の例会には旅の途中メンバーに声をかけたら 7 人の方が大挙初参加して通常とは全く違った雰囲気会の会になりましたが、一度の体験で南極好きになった方々です。今後とも質問などがあると思いますが諸先生方よろしく願いいたします。

でも最近の南極は色々規制だらけの感がしないでも無い旅でした。南極狂の放浪者(7・8 次ふじ・航海科)

岸接会

久松武宏

平成 14 年 3 月 20 日、夕刻、横浜駅近くの居酒屋で岸接会(がんせつかい)の発会準備会をやった。

岸接会と言うのは“しらせ”で唯一昭和基地に接岸していない第 35 次行動の会のことである。

当日、当時の乗組員と観測隊員 14 名が参加し、大いに盛り上がった。隊

長(現極地研所長)も参加してくれる予定になっていたが所用のため欠席され、正式な発会式は別途考えなければならないかもしれないが、実質的に始まった。

年に一、二回やりたいと思っている。

編集後記

第 12 号をお届けします。実は編集担当の勝手な都合で、7 月号を一足早く出版することになりました。というのも、今、私の手元には皆さんに執筆を依頼した原稿が思いのほかたくさん集まり、それを 7 月に出すのでは待ちきれないというのも理由の一つです。蓼食う虫は私も読んでませんが、これを機会に読んでみようかと思いました。東オングル島観光案内は昭和基地の経験者なら抱腹絶倒ですが、松田達郎先生ならではの名文です。今でも通用する内容もあり、オングル島の環境変遷を語るうえでも必須の資料ですね。7 月は 12 号の付録として、これまで出版された会報の総目次を出版する計画です。

編集連絡先: 神田啓史

国立極地研究所 〒173-8515

東京都板橋区加賀 1-9-10

TEL 03-3962-4761

e-mail: hkanda@nipr.ac.jp